

国際交流活動から得た学生の学び —2011年度カンボジアスタディツアー報告—

木下 照子¹⁾*・小野 晴子¹⁾・井関 智美²⁾・三上 ゆみ²⁾

国際活動

(2012年11月28日受理)

2011年度の国際交流・国際貢献活動として「カンボジア・スタディツアー」を実施した。研修内容はHIB・州立病院・アンコール小児病院等の訪問し、キリング・フィールドやトンレサップ湖・アキラ地雷博物館の見学を行った。また主な活動は村の小学校で子どもたちとの交流やジャックフルーツの植樹作業であった。開発途上国であるカンボジア（シェムリアップを中心）の暮らしと国際貢献活動の実際を学び、体験の中からカンボジアの抱える医療・福祉・教育などの課題と各自の専門性を活かした活動を考えることができたので報告をする。

(キーワード)国際交流, 国際貢献, カンボジア, 発展途上国

はじめに

国際交流・国際貢献の目標に異文化体験の中から、多様な価値観や人間観を理解し人間としての成長を促す。また、発展途上国の暮らしと国際貢献の実際を学び社会的な課題を考える等がある。これらの目的目標に適した研修に参加し学生の学びを参加者全員で共有することができた。

カンボジアは1970年代に波尔・ポト政権による大量虐殺や内戦によって国内は混乱したが、1993年、立憲君主制の新生カンボジア王国が誕生し、経済の復興が進められている。国民の8割が農業従事者といわれるが、さらに農業・服飾製造業・観光業や建設業も活発化され経済成長率と共に農村部と都市部に経済格差が課題である。特に水、電気、トイレへの整備は郡部において悪く、郡部と都市との差が大きい。教育においても同様に子どもたちの中にもクメール語が書けない子もいるような現状である。今回の訪問や見学によって教育や医療が日本との大きな違いを実感することができた。施設訪問や見学・活動を通して国際交流・国際貢献活動について考え、カンボジアの遺跡・人々の生活文化を通じた学びを報告する。

1. 研修報告

1. 日程表にそって研修が実施された(表1)。参加者は各訪問・見学先や活動場面でカンボジアの文化・教育・医

療・福祉などの専門性を活かした質問や思いを行動に現すことができた。

2. 研修期間

2012年1月4日から1月8日の5日間

3. 研修先

カンボジア シェムリアップ

4. 参加者

学生 5名(看護学部生 2年1名 1年1名
地域福祉学科 1年3名)

教員 4名(看護学部 2名 地域福祉学科 2名)

5. 研修内容

1) Handicap International Belgium(H I B)訪問

午前8時より施設担当者から見学しながら詳しい説明を受けた。カンボジアにはこのようなりハビリ施設が19ヶ所あるが、2番目に大きい施設である。施設を訪問してくる人を主に5つの疾患に分ける。①地雷障害者、②小児ポリオ障害者、③先天性奇形、④知的障害者、⑤母親の間違った薬物摂取による障害である。手足の障害に対して、義足や義手の製造は使う人のことを考えて造られている。ほとんどの障害者は3日～10日間程度施設に住み込みリハビリが行われる。子どもの場合は父親か母親と一緒にリハビリを受ける。運営は州立であり経営が一段と厳しくなったとのことである。見学について寄付

*連絡先: 木下照子 新見公立大学 看護学部 718-8585 新見市西方1263-2

1) 新見公立大学看護学部 2) 新見公立短期大学地域福祉学科

表1 カンボジア・スタディツアー日程表

月日	都市名	現地時間	交通機関	行程
2012年 1月4日 (水)	関西空港発 ホーチミン着 ホーチミン発 シェムリアップ着	10:10 14:00 19:50 20:50	VN321 VN3823 専用バス	08:30 関西空港集合 関西空港よりホーチミンへ(所要5時間50分) ※空港内での乗り継ぎ特便となります。 ホーチミンよりシェムリアップへ(所要1時間00分) 到着後、入国審査を終えます。 着後、レストランでの夕食と現地説明 【シェムリアップ泊】
5日 (木)	シェムリアップ		専用バス	午前: ●H I B訪問 ●州立病院訪問 ●キリング・フィールド見学 午後: ●アンコール小児病院ビジターセンター訪問 ●トンレサップ湖見学 夕食はレストランで、「アプサラダンス」を見ながら
6日 (金)	シェムリアップ		専用バス	午前: ●CVSG地雷被害者支援センター視察 ●アキラ地雷博物館見学 自立村の小学校で弁当の昼食をとります。 午後: ●自立村の小学校で日本のぬり絵・相撲・その他、子供達と交流 ●カンボジア最大のジャックフルーツ園(開墾中)で植樹作業 夕食は市内レストランで
7日 (土)	シェムリアップ発 ハノイ着	20:30 22:10	専用車 VN834	出発までシェムリアップ市内見学 午前: ●アンコールトム、タ・プロム見学 午後: ●アンコールワット見学、市場見学 ホテルで休憩後チェックアウトします。 市内レストランで夕食をとり、その後空港へ向かいます。 (ホテルチェックアウト18時00分) シェムリアップよりハノイへ(所要1時間40分) 【機中泊】
8日 (日)	ハノイ発 関西空港着	00:30 06:40	VN330	ハノイより関西空港へ(所要4時間10分) 到着後、入国手続きを終え、解散。お疲れ様でした。

が求められた。(寄付の方法は今後検討が必要である)

2) 州立病院訪問

説明は部屋(会議室のような)で行われ病院から2名の医師が参加した。病院は薬を持って帰らせる部門、入院している患者を診る部門、病気を診断する部門がある。1日200人程度の診断をするが肺疾患が多く、続いて心臓病や目の疾患である。入院は約300人であるがベッドは234床であるためベッドのない患者もあるようだ。説明後はそれぞれの治療病棟や外来に当たる部門などを見学し説明を受けた。カンボジアでは下痢を主な症状とする消化器感染症の赤痢、腸チフス、ウイルス感染や蚊の媒介によって発症するマラリア、テング熱、日本脳炎があり日本では発症することの少ない疾患が多いのが特徴である。また性感染症も多く、AIDSは人口の4%がHIV陽性といわれている。

州立病院でも様々な疾患を持った人たちが多く、病院の待合室や病棟では患者及びその家族などで混雑していた。疾患は急性胃腸炎、栄養失調、肺炎、結核などであり最近は交通事故、糖尿病などが増加してきているということであった。州立病院の職員は公立医療施設として公費の低い給与で働いているが、少しでも良い条件の病院に勤務替えするものが後を絶たない。また過去の内戦により多くの知識階級が殺害され、医師、助産師、看護師不足により、十分な医療が提供できない状況である。しかし、カンボジアの首都プノンペンでは医師・看護師の養成が行われつつあるとの説明であった。フランス、ベルギーなどの多くの国から支援を受けながら年々改善しているようであるが、病室内や救急処置室など医療体



写真1 州立病院見学(左から：病院入り口、病院からの説明、説明を受ける学生、病院敷地内・病棟) 制の不備が伺えた。(写真1)

3) アンコール小児病院ビジターセンター訪問

1999年2月にアジアの恵まれない子どもたちの支援を目的とし設立された。現地の人たちへの医療や衛生教育はもちろんであるが、医療スタッフが医療診療・運営活動ができることを目指し、NPO法人フレンズ・ウィズアウト・ア・ボーダーがプロジェクトしたものである。

病院施設内においてアンコール小児病院の活動についてビデオ鑑賞し、日本人看護師の赤尾和美氏(写真2)の話聞くことが出来た。赤尾氏は日本の看護学校卒業後、渡米しハワイ州の看護師免許を取得し、HIV専門クリニックで予防教育担当として勤務した。その後カンボジア

でボランティア活動を通して、医療不毛の地で子どもを救うという自らの熱意から、HIVと訪問看護を専門とし現在のアンコール小児病院で活躍中である。短い時間ではあったが現状を通した話は学生にとって印象の強いものであった。学生Aは「時計を使わない人に12時間置きに薬を飲む」ということをどのように伝えるのかの質問を受け、日本では考えられない現状に驚き、考えさせられることが多くあったと記述していた。また赤尾氏の「カンボジアの子どもたちを守る」という使命に感銘を受け支援活動の必要を感じた。施設内は診察の順番を待っている子どもや家族があふれている状況であったが、家族へ衛生面や食事指導（調理方法も含め）などの実践を通して指導する設備も見られた。



写真2 赤尾和美さん

4) トンレサップ湖見学

東南アジア最大の湖であり、雨季と乾季で3倍もの大きさが変化する。遊覧船に乗って水上集落の様子を見学できた。豊かな漁場を活用し生活する湖の水上集落の小中学校・バッテリー屋・民家などの生活空間も見ることが出来た。遊覧船内で子どもが肩たたきで「1ドル」と手を出すのに皆困惑した表情であった。

5) シェムリアップ市内見学

東南アジア最大級の石造建築アンコールワットの第1回廊から第3回廊のレリーフの説明を受けながら元気良く歩いた。その他アンコール・トムやオールドマーケットなど多くの遺跡や生活に触れることができた。

6) カンボジアの村を支援する会(CVSG)

地雷障害者、エイズ患者、孤児、老人家族、母子家族などが人間らしい生活が出来るよう多角的な支援活動をしているNGOである。自立村での子どもたちとの交流では、村の子どもたちには日本語がわかる子どももいて学生と話しをしたり、おっかけっこなどをして交流していた。体のサイズに合わない服を着ており、洗濯も行き届いていない様子である。子どもたちの着替えの必要性を

感じた。次回の訪問には古着などの物資を準備するなど、必要とされる支援活動が実施できるような検討が必要である。(写真3)



写真3 自立支援村の子供たち

5. 主な活動内容

1) 農村部の小学校で子どもたちと交流

全員約100名程度の子供たちを2班にわけそれぞれに活動を行った。①日本の国技である相撲を行った。全員が行うには狭すぎて一部のみとなったが、子供たちの関心は高く笑顔が見られた。そのほかにも指相撲、腕相撲なども行った。②教室では日本の行事・昔物語のぬり絵を行った。子どもたちの中には知っている日本の行事があった。人数が多すぎてクレヨン・色鉛筆が十分には揃わなかったもののA4サイズのコピーのぬり絵は説明を聞く間もなくどんどん塗られていった。色とりどりのぬり絵が多く出来上がった。多くの鉛筆や色鉛筆、クレヨンなど使用した物すべて通訳を通して学校の先生に子供たちに活用してもらうよう依頼したが、紙の不足に気づかされた。塗り絵の題材は低学年のものでありより高度なものも準備する必要があった。(写真4)

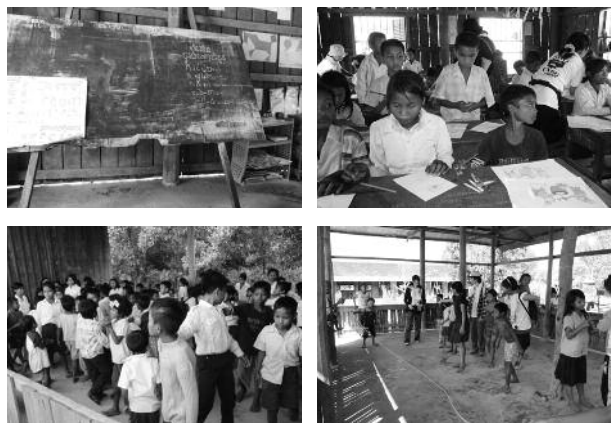


写真4 農村小学校での活動風景

2) ジャックフルーツの植樹作業

村の小学校から農園までは暑さと、歩きにくい砂地の道を30分程度で着いた。周囲は大きな実がいくつも付いているジャックフルーツの木がいくつかあり、その周辺は野菜畑であった。農園では子どもたちが植樹用の苗を運び、指定された場所に1本ずつ、一人当たり3〜4ヶ所に植えた。ジャックフルーツはカンボジアでは高級フルーツで、1kgあたり50円程度である。この価格は公務員の半日分の給与に相当する。このように高級フルーツであるジャックフルーツの植樹により、将来地域の方たちが経済的に潤うことを期待して植樹を行った。(写真5)



写真5 ジャックフルーツ植樹の場面 右は村の人と一緒に植樹

2. 学生の研修報告

参加者全員で今回のカンボジア・スタディツアーの学びと振り返りを行った。学生からは口頭で①初めての海外研修の体験について感激したこと、②日本とカンボジアの違い、③想像していたカンボジアと実際に見聞きしたカンボジアの現状の違い、④語学の必要性、⑤赤尾和美氏に出会えたことなど思い思いの発言から学びを共有しスタディツアーの意義を再認識することができた。

学生全員が表2のように、カンボジアを見てよかったところ、カンボジアから日本を見て、国際交流・国際貢献、国際支援についてレポート課題とした。看護学科の学生は「国際交流活動」の科目単位取得に必要な記録「国際交流活動日誌」が提出された。

研修を終え、今私たちができることはそれぞれが学んだことを、身近な人へ伝えることである。その方法に大学のイベントなどでポスター展示による大学内外への発信をすることとなり全員の協力で作製された。(写真6)

まとめ

ボル・ポト政権のもとで200万人の市民虐殺があつて20年を経過した今も、医療、経済、教育ともに郡部、都市部の格差は大きく発展の途上であるといえる。このような機会に研修を行ったことは貴重な体験になった。学生たちは訪問先や、見学を通して状況を理解するとともに、地元の方の笑顔、特に子どもたちの明るい表情に感激している様子など、人間としての成長が伺えた。私たちがカンボジアで学んだことがいかに多いか、更にカンボジアは気づきの場であったことを認識することができた。今後も学生の時期に発展途上国での研修機会が得られ、その体験を行った学生たちの将来に国際社会において活躍できることを期待する。

文献

- 1) 中山亜弓, 木下照子, 谷野宏美, 明石俊子: 開発途上国との国際交流から得た学生の学び—2012年度カンボジア・スタディツアー報告—, 新見公立大学紀要, 32, 205—210, 2011.
- 2) 中山亜弓, 谷野宏美, 内藤一郎, 藤田小矢香: 国際交流から得た学生の学び—2009年度カンボジア研修報告—, 新見公立大学紀要, 31, 199—203, 2011.
- 3) 山内圭, 古城幸子, 岡宏美, 宇野文夫, 難正義: 新見公立短期大学の国際交流・国際貢献, 新見公立短期大学紀要, 29, 143—150, 2008.
- 4) 岡宏美, 古城幸子, 川崎泰子: 学生が行うカンボジアでの現地活動の新たな試み—2008年度カンボジア研修報告—, 新見公立短期大学紀要, 30, 121—125, 2009.
- 5) 岡本亜紀, 岡宏美, 杉本幸枝, 岡本直行: 学生ができる国際貢献—2006年度カンボジア研修報告—, 新見公立短期大学紀要, 28, 183—189, 2007.
- 6) 赤尾和美: この小さな笑顔のために—日本人ナースのカンボジア奮闘日記—, 朝日新聞出版, 2008.

表2 カンボジア研修後の学生レポートから一部抜粋

学生	カンボジアを見て良いところ	カンボジアから日本を見て	国際交流・国際貢献 国際支援について	その他
A	日本をカンボジアから見る事ができた。日本の中でしか物事を考えていなかった。カルチャーショックの意味を理解した。	カンボジアでは子どもでも患者の世話をし、親の手伝いをする。日本は家族が薄れてきているし、家族のことであり、自己中心になっている現状がある。	現在のカンボジアの状況を見てありのままを伝える。また日本が支援していることを知り伝えること。	来年も新しい目的をもってツアーに参加したい。
B	視野が広がった。同じ国でも観光地と農村部は大きな違いがある。	日常生活の中で日本の発展を感じた。技術が進歩して便利な生活が送れてもそれが幸せだろうか。	募金。カンボジアのことを多くの人に知ってもらうこと。自分のもっている知識や技術を提供すること。	日本の優れた環境の中でもっと勉強する。
C	現地の方との交流 オアンコール遺跡	日本のあらゆる面での平和を感じた。生活や医療の違いが大きい。	募金活動の必要性和見たこと聞いたことを多くの人に伝える。	支援団体に入会は考えられない。
D	想像していたよりもきれいでレストランは清潔で食事もおいしい。笑顔があって癒された。家族のために力を合わせるのはどの国も同じである。	日本では最低限の生活が保障され教育制度が整っている、また道路・交通事情など科学技術は素晴らしい。しかし日本では高齢者が多い。	募金・物資の調達。 周りの人に伝え、関心や興味を持ってもらう。	カンボジアは素晴らしい文化と伝統がある。
E	お城のようなホテルがあった。食事が美味しい。	貧富の差により教育が受けられない子どもがいる。日本では個人差があるが最低の日本語やアルファベットの読み書きはできる。	NGO団体の重要性を知りみんなに伝えること。カンボジアの状況を知りカンボジアをこれからも見続けること。	観光するだけでは味わえない世界が見られた。

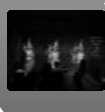
2012年1月 カンボジア・スタディツアー報告

初日の夕食



・宿泊先であるサリナホテルでの夕食
カンボジア料理は香辛料がふんだんに使われており、最初は食べるのに苦労した。
参加者の中には、「量が多い」や「初日で疲れているので」もう少しあっさりしたもの食べたい」等の意見もあった。

アプサラダンス鑑賞



・一つ一つの動きがゆったりとしていて、しなやかで繊細な動きが印象的な踊りだった。
・「アプサラ」というのは「ヒンドゥー教神話に出てくる水の妖精」のことで、小さい頃から厳しい訓練を受けてきた子が、アプサラとして華やかな舞台に上がることは子供たちにとって憧れである。

アンコール・ワット



・クメール語でアンコールは「王都」、ワットは「寺院」という意味。
・早朝には、幻想的で素敵なお朝日を見学することができた。壁画には、一つの物語が描かれており、人の顔、生物、武器などが細部まで細かく掘られており、ヒンドゥー教の神々や神獣のレリーフもとても印象深かった。

HIV(ハンディーキャップインターナショナル)訪問



・1982年に立ち上げられたNGOで身体に障害を持った方々の理学療法による治療やリハビリテーション・補助具による機能回復訓練等を行い、全て無料で利用者様に提供をしている。
・施設内の見学や補助具の製作工程を見学したり、機能回復訓練で使われる道具を体験した。

CVSG訪問



・NGO団体が運営する、自立支援材を訪問し、職員であるタタさんから話を聞き、村の方と交流した。
・CVSGでは、身元をたすけの支援ではなく、働く意欲向上のため日本の農業技術を提供することで、自給自足の生活をしている。
・他の支援としては、井戸の建設、橋や道路の建設・修理、孤児の受け入れ等の社会貢献を積極的に行っている。

アンコール・トム



・アンコール・ワット遺跡群の一つ、アンコール・トム
・写真は5つある南大門の一つを写したものだ。
・世界遺産の一部であるにも関わらず、車やバイク、徒歩で通り抜ける人、観光用の象などがこの門を利用しており、幅は車1台がやっと通れるほど。

州立病院訪問



・シェムリアップの総合病院（州で一番大きい病院）を訪問した。医師や看護師など189名のスタッフが働いており、病気の診断・手術などのケアを行っている。
・病院内を回った際に患者さんと出会ったが、この場にいっていいのだろうかという、申し訳ない気持ちになった。

小学校訪問



・生徒は様々な年齢の子どもがおり、カンボジアでは日本のように一日授業を受けるのではなく、午前と午後2つの部制になっている。
・ここでは生徒たちを2グループに分け、日本の相撲と、日本の四季の行事が描かれている塗り絵を体験してもらった。塗り絵では見本となる絵を持ってみせると、見本通りにきれいに塗ってくれた。

帰国前の夕食



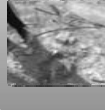
・カンボジア最後の夕食はカンボジアの鍋、チュナン・ダイをいただいた。
・鍋の中にはかぼちゃの花と葉、湯葉、牛肉、卵などを入れて少し辛めの味噌ダレにつけて食べた。

キリング・フィールド



・キリング・フィールドとは、ポル・ポト政権下で大量虐殺がおこなわれた刑場跡の総称。1970年代に、数千人の市民が犠牲となった。無言のうちにこうなれば、当時の残酷さを今に伝えている。
・ガイドから説明を受けた後、自由時間があり、慰霊のために建てられたお慰霊にもお参りをした。

ジャックフルーツ園

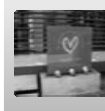


・小学校から30分ほど歩き、農場でジャックフルーツの植樹を行い、畑のまわりにジャックフルーツの苗木を30本ほど植えた。
・園の土は日本でもよく見るような栄養があって軟らかい土ではなく、硬くてボロボロしていた。



活動場所：シェムリアップ

アンコール小児病院



・アンコール小児病院では、まず病院の紹介DVDを観賞した。
・鑑賞後は、国際的に活動されている赤十字看護士からお話を聞く事が出来た。特に印象に残ったのは「衛生という概念がない人にとりして、自分からもらう」というものであった。また、非大学にきていたという、もっと医療についてのお話を聞きたいと思った。

アキー・ラー地雷博物館



・現在カンボジアのアキー・ラー（地雷除去屋）として活動しているアキー・ラー氏が館長を務め、自身が除去した地雷や武器を展示している。
・展示してある地雷を見て、戦争の悲惨さや地雷の恐ろしさを改めて考えさせられた。



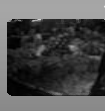
国際看護士の赤尾さんと

トレンサップ湖



・トレンサップ湖とは、雨季には日本の琵琶湖の10倍にもなる東南アジア最大の湖。湖というよりも、海のように思えるほど大きかった。
・船の上からは、湖上には水上生活者の家、小学校、農林水産省などを見ることが出来た。

マーケット



・オールドマーケットとナイト・マーケットで買い物をした。オールドマーケットは賑やかで人がわいわいとしていて活気ある感じがしたが、ナイト・マーケットはのんびりゆったりとした雰囲気だった。
・ワンピースやシルクの布、置物など、お店の方と交渉して安くしてもらうことができた。

国際看護士の赤尾さんと
スタディー・ツアー参加者
看護学科：2年生：富永駿、1年生：坂元祥子、
地域福祉学科：1年生：安井章乃、山田奈津美、
後藤雅博、
引率教員：井関智美、小野晴子、三上ゆみ、
木下照子

写真6 学生全員で報告用にまとめたポスター